

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概 要
1 (学術論文) Blood cell and vessel formation following transplantation of activin-treated explants in Xenopus 《筆頭論文》	共著	2007年7月	Biol Pharm Bull. 30 pp. 1856-1859 発行所名 日本薬学会	解離させたツメガエル胚未分化細胞 にアクチビン処理を施し、再び集合体を作製する。それをツメガエル胚へ移植すると移植胚は血管血球系へ分化された。 (長嶺憲太郎、古江美保、福井彰雅、松田明、堀 隆光、浅島 誠)
2 (学術論文) XRASGRP2 expression during early development of Xenopus embryos 《筆頭論文》	共著	2008年6月	Biochem. Biophys. Res. Commun. 372 pp. 886-891 発行所名 ELSEVIER SCIENCE	新たに単離した遺伝子 XRASGRP2 が血管で発現している事をあきらかにした。 (長嶺憲太郎、松田 明、浅島 誠、堀 隆光) 共同研究につき本人担当部分抽出不可能
3 (学術論文) Identification of the gene regulatory region in human rasgrp2 gene in vascular endothelial cells. 《筆頭論文》	共著	2010年7月	Biol. Pharm. Bull., 330 pp. 1138-1142 発行所名 日本薬学会	ヒト RASGRP2 遺伝子のプロモーター解析を行い、転写調節のメカニズムを解明した。 (長嶺憲太郎、松田 明、堀 隆光)
4 (学術論文) Ras guanyl nucleotide releasing protein 2 affects cell viability and cell-matrix adhesion in ECV304 endothelial cells	共	2013年6月	Cell Adhesion and Migration, 7 (3) pp. 262-266 発行所名 Landes Bioscience	ヒト RasGRP2 の機能を明らかにする目的で、血管内皮様細胞に過剰発現させた細胞株を用いた性状解析を行った。この結果、ヒト RasGRP がカルシウム依存的に Rap1 を活性化することを明らかにした。 (瀧野純一、長嶺憲太郎、堀 隆光)
5 (学術論文) Multi-Detection by Target Mixed Loop-Mediated Isothermal Amplification 《筆頭論文》	共	2014年 2月	International Journal of Biochemistry Research & Review,4(3),pp.243- 52 発行所名 SCIENCE DOMAIN international	LAMP 法を応用することによって、複数個のサンプルを同時に増幅することができ、それらを別々に検出することが出来る方法を開発した。 (長嶺憲太郎、葛原陽子、瀧野純一、堀 隆光、納富継宣、神田秀俊)
6 (学術論文) In vitro identification of nonalcoholic fatty liver disease-related protein hnRNPM	共	2015年2月	World. Journal of Gastroenterology 21(6), pp1784-93 発行所名 Baishideng Publishing Group Inc.	フルクトース処理した Hep3B 細胞のタンパク質を二次元電気泳動により分離し、抗 TAGE 抗体によって認識されるスポットから得られたタンパク質を解析した結果、HNRNPM であることがわかった。 (瀧野純一、長嶺憲太郎、竹内正義、堀 隆光)
7 (学術論文) Gene expression changes associated with the loss of heterogeneous nuclear ribonucleoprotein M function	共	2017年4月	American Journal of Molecular Biology 7, pp87-98 発行所名 Scientific Research Publishing	RNA干渉によってHNRNPMの発現を抑制したヒト肝癌細胞株Hep3Bを用いてDNAマイクロアレイ解析した結果、166遺伝子が1.5倍以上増加しており、104遺伝子が1.5倍以上減少していた。これらの遺伝子についてGO解析を行い細胞内の局在について解析した結果、細胞外で機能すると同定された遺伝子のうち、発現が増加したものは10遺伝子あり、減少したものは4遺伝子見出された。 (瀧野純一、長嶺憲太郎、鈴木 美琴、逆井(坂井) 亜紀子、竹内正義、堀 隆光)